

## 第二講 本願成就文

### 一、一念の開發

#### 一念

次には、豎・横・出・超、即ち聖人独特の教判の問題について書かねばならぬのであるが、これは最後にしたいと思う。そこで私は、信巻末に移って、本願成就文について、謹んで聖人のみ教を頂きたいと思う。

聖人は、大經下巻の本願成就文を出されるに先立って、信樂開發の相について、その領解を告白せられる。曰く、

「夫れ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念有り。一念とは、斯れ、信樂開發の時剋之極促を顯し、広大難思の慶心を彰すなり」と。

聖人は、すでに他力信心の相について詳細に説かれた。信心は全く「夫れ、以れば、信樂を獲得することは如来選択の願心自ら発起す。」と説かれたるが如く、如来本願の回向顯現によつて発するのではある。しかし、翻つて行者の機について言えば、疑惑、自力が本願の真実によつて粉碎せられるところ、必ずその機の上に、新しき信心を成就しなければならぬ。閉じたる扉の開かれるが如く、発射されたる弾丸の命中するが如く、衆生の心中に一大革命の成就される、その信心開發の端的の相を「一念」と言われたのである。如来の願心より発起せしめられる信が、衆生の現実の機に於いて開發するのである。不発の爆薬に何等の意味がないように、衆生の機に於いて一念開發せざる信樂はあり得ない。衆生の現実の機において開發してのみ、信樂は事実となり、具体的となるのである。

#### 一念とは

すでに信巻本において、天親菩薩の一心について詳説せられ、至心、信樂、欲生の三信を一心に歸結せられた。まことに信樂とは一心である。一心こそ信心である。信樂をおいて外に一心はない、一心をおいて外に信樂はない。しかし一心という限り、それは又、如来心そのものである。しかるにその純粹なる一心は、必ず衆生の機に実現せられて、衆生の実験、その心的事案になりきらねばならぬ。その衆生の思念そのものになりきつた相、即ち「一念」である。されば念仏の行者、自力疑心より他力信心に転入するに、必ずこの一念なかるべからず。故に、「それ真実の信樂を按ずるに、信樂に一念あり。」と末卷、巻頭に説かれる所以である。しかし「信樂に一念あり」と言われても、信樂より外に一念があるのではない。信樂が衆生の心的事実となるその端的を、時に約して「一念」と言われたのである。

されば「一念とは、斯れ、信樂開發の時剋の極促を彰す。」と次いで説かれる所以である。まことに、信樂開發する時剋の極めて速かなる、一念間髪を入れざる刹那を「信樂に一念有り。」と言われたのである。しかし時刻を表わすと言つても、「六十刹那を名づけて一念と為す」と言うが如き客観的な時間の一念ではない。時間的に現わされたものであつても、もつとも短き時刻、即ち信樂開發の時の極まりを現わされたものである。

『論註』に曇鸞大師が「百一の生滅を一刹那と名づく。六十刹那を名づけて一念と為す。此の中に、念と言うは、此の時節を取らざるなり。」と言われ、又、『一念多念証文』に、「一念というは信心を得る時の極まりをあらはす語なり。」と言うが即ちこれである。即ち、概念的な時間の長短そのものを現したのでなくて、時の極、時間の觀念のつきた境、時間を超えたる信樂開發の端的、心的革命の大転化を指して一念と言われたのである。

であるから、一念とは実に衆生煩惱泥中に如来本願の眞実が活現する初一念を言うのである。衆生において言えば、如来の全てを聞信の勝縁によつて獲得する一念を彰わすのである。されば『浄土文類聚抄』には、

「乃至一念というは、是れ更に觀想、功德、遍数等の一念を言うには非ず、往生の心行を獲得する時節の延促に就いて乃至一念と言う也。応に知るべし」と。

即ち一念とは、称名の遍数等を言うのでなく、往生の大因たる心行、即ち大信大行を獲得する一念を言うのである。獲得したる大行は直ちに、念仏申さんとする信心であり、やがて口業の上に称名となつて現われはするが、その称名以前、六字の大行を獲得したる一念の信を、今「一念」と言われたのである。「往生の心行を獲得する時節の延促に就いて乃至一念と言ふ也。」延促とは極速と同一義である。多少と言う場合の多、緩急と言う場合の緩と同一である。延のびというのではない。

### 難思の慶心

今まで、三毒の煩惱より外に何も持たなかつた衆生心に、聞其名号信心歡喜の一念に、如来の全てである大行本願は回向せられて、信心は一念に開發せられる。この時、行者は初めて機法一体、仏凡一体の妙境に直入して「廣大難思の慶心」を獲得するのである。まことに信一念は冷たき無内容なる心ではない。行者のかつて経験せざる廣大なるよろこびである。思を超え議はかりをすて、直ちに往生成仏の大因を決定し、久遠の本仏、永遠のみ親の光明の慈懷に攝取不捨される時、六道輪廻の妄業の全てを智断せられて、至純清淨なるまごころの全てが、貪瞋煩惱の唯中に徹到して、破闇滿願、生々世々の初事を成就して、難思の大慶喜を得るのである。この一念、過去久遠に響き、未來永遠に及ぶ。一念、三世を貫いて廣大無辺、衆生一切の思いを否定して、如来眞実の大慶喜心のみ、その全身全霊を動転せしめるのである。2  
まことに信樂の一念こそ、久遠のみ親と六道輪廻の衆生との永遠に仏凡一体に融合する、尊き極みの時である。

教主釈迦牟尼世尊は、勤苦六年の後、菩提樹下に端座して一切の悪魔を降伏し、一切種智を發揮して法性眞如を証し、ついに如来正覺を成就せられた。親鸞聖人は、二十年の聖道修行を経て、二十九歳、吉水源空上人の草庵において、この一念、廣大難思の慶心を獲得せられた。我等俗界の一粟も亦、同一信を獲得せたまうのである。積尊正覺の一念は高くして凡慮の及ぶべき所に非ずと雖も、その一念にひらく大信仏性の清淨心に至つては二つあるべからず。積尊正覺の一念、絶対なれば、聖人の御入信亦絶対であり、我等帰命の一心も亦絶対である。

人生わずかに五十年、その如何なる寸陰といえども、絶対の価値を持つべきである。しかるに念仏なき貪欲のみの一生は、如何なる現実もこれを泥土に投げやり、何時か、何処かと眼を常に将来の上のみはり、欲望の幻を追うて、いたずらに五十年を空費するのである。一切の時は全て尊ばるべきである。生活経験の一粒一滴までも尊重さるべきである。しかれども、唯に人間の苦樂の業風にのみ吹き流さるる凡夫は、ついに尊き人生を持たぬのである。ここにおいて、その一生の尊重せられるに先だつて、まず、ある時、ある処、永遠にわたる絶対尊高、廣大無辺、眞実大慶喜の一念、終生にわたる永久の記念塔、不退転の出発点がなくてはならない。まことに信一念こそは人間生れて到り得る唯一絶対尊高の一念である。

憶え、この大信こそ、釈迦牟尼仏の仏々相念の大寂定より説かれたる唯一絶対の眞実教によつて生れたるものではないか。憶え、この大行こそ、三世諸仏の讚嘆したまう仏名ではないか。印度にあつて、龍樹、天親二菩薩の行じたまいし大行ではないか。曇鸞、道綽、善導、

源信、法然、親鸞の大聖によって行ぜられ、その人格を不滅の聖座に輝きあらしめたる大信心ではないか。その同一本願力は今、この愚悪の一凡俗の上に訪れて大信となり、凡夫さながらに、五十一段、補処の弥勒と同等の絶対価値を回向したまうてあるではないか。

されば無量寿仏の本願力に生かされることは、恒沙の諸仏、積尊、三国七祖、親鸞聖人等、かかる絶対人格の血脈を相承することである。同一血潮に燃ゆることである。一河の流れに参徹することである。廣大難思の大慶喜でなくて何であろう。すでに出世の本懐を全うしたるものである。衷心の志願を満たされたのである。本質的道義が成就したのである。大善大功德を獲たのである。無疑不退の一道が打開されたのである。金剛不壊の大信決定したのである。まことに「廣大難思の慶心」でなくて何であろう。しかしてこの一念、臨終まで一貫するを、念仏行者の生活とするのである。

聖人は、かく信樂の一念を顕彰された。続いてその教証を大經の上に見んとせられる。本願成就の文がそれである。